IV 自己点検・評価委員会報告

1999年度に引き続き研究所の自己点検・評価が以下の委員によって実施された。2000年度は 10 分野と人類進化モデル研究センターおよびニホンザル野外観察施設における過去5年間(1996-2000年) の研究活動の外国人研究者による自己点検・評価を行った。この外国人研究者の評価と各分野、センター、施設が提出した過去5年間の研究業績を「External evaluation by foreign scholars of the research activities at the Primate Research Institute, Kyoto University between 1996－2000」としてホームページに掲載した。またすでに出版されている研究所自己点検・評価報告書の「サルとヒトの接点を求めて (1996)」と「明日の霊長類学の創造に向けて (1997)」および「21世紀を目指す霊長研 (1998)」をホームページに掲載した。さらに霊長類研究所年報、霊長類学系カリキュラム、「サル類の飼育管理および使用に関する指針」と「野生霊長類を研究するときおよび野生由来の霊長類を導入して研究するときのガイドライン」についてもホームページに掲載した。また「京都大学自己点検・評価報告書 II 2000」の霊長類研究所に関する項目を作成した。その他、国立大学の独立行政法人化に関する資料として文部省ニュース、大学評価・学位授与機構の自己評価実施要項等を検討した。特に、将来実施されることが予想される研究所の分野別研究評価について詳しく検討した。

自己点検・評価委員会：石田茂光・鴨嶋武忠・小嶋祥三・茂原信生・中村克樹・濱田　穣・
林　基治・平井啓久・松村秀一

（文責：林　基治）

V COE としての活動

1. COE 形成基礎研究費「類人猿の進化と人類の成立」平成12年度研究全般について

研究課題を以下の 4 班構成で進めている。社会・生態班ではウガンダ国のカリンズの森に新しいチンパンジーのためのフィールドの確立を目的として特に現地スタッフの訓練を行い、日本人が帰国している場合にも体毛、尿、糞などの非侵襲的試料の収集を開始した。森に 5km の道を 500mおきに 10 本切り、そこを何日かごとに歩き、ネストからの試料採取を行っている。コンゴで試料収集を行いチンパンジーの中部の亜種の試料を採取した。この亜種についての試料は世界的に見て希少である。来年度も継続調査を予定している。タンザニア、マハレ山塊国立公園で、野生チンパンジーが葉を両手で持ち口をつけるという行動が観察されてきたが、何のための行動なのか明らかでなかった。同公園での一年に及ぶ、M集団の調査をおこなった。調査中にリーフグルーミングに使用された葉 50 枚を回収し、うち 1 枚に死んだシラミ成虫が付着しているのを確認した。またビデオ記録により、シラミがチンパンジーの下唇から葉へ移され、二つに折り外側からシラミをつぶし、再びシラミを口に戻すのを確認した。この行動は、毛づくろいで